2006/06/11

２００５年度長門市・ボストン調査報告のなかから―鯨過去帳と鯨絵巻―

杉本史子

※ボストン調査全体の報告は、ＭＬに報告済み

１　長門市海雲山寺向岸寺の鯨墓・位牌・過去帳

２００５年５月１４日、蔵持・藤田・杉本による長門調査で、長門市通の浄土宗海雲山向岸寺の小松公映氏からお話を伺った。同寺は、「鯨鯢過去帳」・鯨位牌を伝え、毎年鯨回向を行っている。

鯨墓・位牌

向岸寺清月庵（讃誉上人の隠居所）には花崗岩で造られた鯨墓がある。くじら資料館のパンフレット及び「鯨墓（国史跡指定）の由来」によると、高さ2.4メートル、幅0.46メートル。明治時代まで埋葬された鯨の胎児７０数体（母鯨を解体したときに出た）を埋葬した。讃誉上人は、鯨組網頭を勤めた池永家の出身（**位牌画像**）で、延宝七年（1679）、清月庵で鯨回向を行ったと伝えられている。

＜文字記載＞正面に「南無阿弥陀仏」と彫られた下に、「業盡有情雖放不生、故宿人天同證佛果」とある。これらの文言は、鯨位牌にも記されている。右側には「元禄五年設壬申五月、願主設楽孫兵衛、池永藤右衛門、早川源右衛門」とある。鯨位牌背面には、「元禄五年壬申五月十二日、隠居念誉上人・現住松誉上人、願主山田孫三郎・池永藤右衛門・設楽孫兵衛諸檀那中」とある。

＜清月庵の附属建造物＞石造手水鉢には、「元禄九丙三月十七日年奉寄進、南行河町泉屋源兵衛」（摩滅しており、正確な読解は、後日の課題）、常夜燈明には「享保三天五月八日」の日付あり。

鯨鯢過去帖

「鯨鯢過去帖」は、元は三帖存在したが、台風などで失われ、現在は１帖のみ伝えられている。山口県有形民俗文化財に指定されている。折帖、表紙は黒塗の木製で、「鯨鯢過去帖」と記された手書題箋が付されている。折りたたんだサイズは、天地２４.5センチ、幅１０センチ、厚さ2.5センチ。本文部分は、銀色の雲母引きの装飾料紙を用いている（小松氏によると、他にこのような紙を使ったものはない）。

＜序＞冒頭に、華頂山義山上人撰による「霊簿序」を記す。義山上人は、江戸時代中期の学僧（１６４８－１７１７年）で、法然上人伝注解の決定版ともいうべき『円光大師行状画図翼賛』６０巻で知られる。京都生まれ、江戸増上寺などで修学し、天和三年京都に戻り、華頂山麓入信院で講学、宗典類の校訂・刊行に当たった。（『浄土宗大辞典』山喜房仏書林、１９７４年）。

＜本文＞現存「鯨鯢過去帖」は、各月の当該日を二丁分でという体裁をとる（**画像**）。１行が上中下の三段に分けられ、上段に各鯨の戒名・種類・体長（例「常譽本念、ザトウ、八ヒロ」）、中段に捕獲した日付・場所・稀に価格（例「文化三寅ノ年十一月十六日、紫津ケ浦取」）、下段に担当者名（例「早川権左衛門役中」）が、複数の筆で記されている。判読できる記事からは、中段に書かれている年号は享和２（１８０１）～天保８（１８３７）年。多くは「〇〇（捕獲場所名）ニテ取」と記すが、「〇〇ニテ死ス」と記入されているものもある。意識的な書き分けかどうかは不明である。

＜記載当時の状況＞『長門市史』（１９８１年）によると、瀬戸崎浦は１８世紀後半には休業（安政３～文久３年に一時復活）、通浦も１９世紀に入ると操業が困難となり、九州の突鯨組の入猟を募ったり、藩からの借入金に頼るという状況を重ねて幕末を迎えている。「鯨鯢過去帖」には、たとえ

ば文政１１年には５頭が記されているが、これらの記事の意味は、他の史料を参照した検討が必要であろう。また、「鯨鯢過去帖」の記述に対応する鯨組の書類があるのか等についても検討の必要があろう。

＜人間の過去帳との比較＞同時代の人間の過去帳は、「鯨鯢過去帖」に比べれば、和綴・楮紙という質素な体裁（**画像**）である。幕末３２世住職によるものを含め、何度か補修されたあとがある。

＜回向における扱い＞小松氏によると、鯨回向は毎年５月で、「鯨鯢過去帳」をうやうやしく持ち上げ（現在は剥落を恐れ、閉じたまま行う）、住職が作成した表白（ひょうびゃく）を読み上げる。式次第は、浄土宗の普通の手順に従っている。

鯨過去帳については、長門市教育委員会『長門の文化財』１９９１、田上繁「熊野灘の古式捕鯨組織」『海と列島文化８』（ｐ３７７）、樋口英夫ほか『海の狩人―日本の伝統捕鯨』（平河出版社ｐ８１－９３）、吉原友吉『房南捕鯨　附鯨の墓』（郷土史料相沢文庫ｐ１７１）、藩による捕鯨への関与については、徳見光三『長州捕鯨考』（長門地方史料研究会、１９７２）、多田穂波『見島と鯨』（見島と鯨編纂会、１９６８）、多田穂波『明治期　山口県捕鯨史の研究』（マツノ書店、１９７８）、伊豆川浅吉『土佐捕鯨史』上下（『日本常民生活資料叢書』２３巻、三一書房、１９７３）の研究がある（森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会、１９９４より）。

２　ハーバード大学サックラー美術館所蔵鯨絵巻

『鯨鯢記目録　上』（表題は巻子ウワ書による、手書手彩色、巻子、1985,647）Philip Hofer が、1969 年にニューヨークで購入したもの。

冒頭目録には、以下のように記されている（ルビ省略）。

「鯨鯢記目録

一　天地開闢之事　付摂津国難波大内裏の事

二　三喉の大魚始難波浜飛揚事　付天王寺の衆僧受勅祈悪龍（あくりょう）事

三　大魚乃名を公卿詮議の事

四　鯨鯢の姓名窺事

五　難波の浜へ御幸の事　付鯨鯢名所の事

六　鯨突組由来乃事

七　鯨突繁昌の事

八　鯨突旦那深沢儀太夫死去の事

九　鯨突旦那野遊并色に迷事

十　鯨突旦那愛美童事　付久庵意思見脈事」

しかし、実際の内容は、

「天地開闢之事　付摂津国難波大内裏の事

三喉の大魚始難波浜飛揚事　付天王寺の衆僧受勅祈悪龍（あくりょう）事

鯨突組由来乃事

鯨突繁昌の事」

であり、目録上の３～５、８から１０は、現存巻子には収録されていない。

天地創造から筆を起こし、「鯨といふ大魚」が初めてに「日本」で「見初められた」由来を記述する。白雉９年１２月、難波浜波打ち際で大魚がはねまわり、公卿が詮議して、神仏の力で追放すべしと決定される。勅使が天王寺に派遣され、神輿が担ぎ出される。17 日かけてこれらの３頭の鯨は

ようやく折伏される。
　ここから、伊勢国内海三郎二郎の栄華、「一揆を紀州の国中におこし」た紀伊国大地の浦の住人大地宇右衛門、「日本にはたをあぐるもの」熊野住人藤代与四兵衛をはじめ、「上方旦那の大名」たちについての栄華についての記述となる。

※白雉９という年号無し　白雉元～５（６５０～６５４）
※四天王寺由緒関係には記載無し
　　ただし同寺の鐘楼の正式名称は「鯨鐘楼」（大久保好『四天王寺由緒沿革記　全』明治２６年　１０１５－１１１）
※　国立劇場で歌舞伎・能の分類カード検索するも、関係した演目無し
※　今後、近世地誌関係検討

本絵巻の成立は近世以降
　　神輿担ぎ出し院政期以降頻出、「一揆」、鯨組の栄華、「日本」へのこだわり

３　若干のコメント－鯨と人間社会の関係をいかにとらえたか

森田１９９４：鯨墓・位牌・過去帳とは
一頭一頭固有名で共同体に記憶される→集団的記憶の中で特別な生物・聖なるものとして経済的価値を越えた存在へと昇華、人間と鯨を一つの文化的空間に配置する自然観の誕生

３－１　鯨への恐怖

　○『日本書紀』敏達天皇２年（５７３）８月丁未（１４）条　高麗送使の吉備海部難波という人物の復命に、「海の裏に鯨魚大きなる有りて、・・・難波等、魚の船飲まむことを恐りて、入海ること得ず」
　○源信９８５年撰述「往生要集」（→浄土思想、「栄華物語」～江戸明治のひらがな記述絵入本、阿弥陀像・六道図などの美術品に影響（中井真孝「往生要集」世界大百科事典、日立デジタル平凡社、１９９８）
　　大海の「摩竭大魚」の折伏―人中に生るることを得

３－２「災異」という捉え方の枠組み

　　「災害」―大水・干ばつ・虫害、「怪異」―日蝕・彗星・動物の異常行動
　　天は、まず災害で譴告、さらに怪異で恐懼させる（前漢　董仲舒）
　　漢書以降、歴代正史は各時代の災異を記録
　　（溝口雄三・丸山松幸・池田知久『中国思想文化事典』東京大学出版会、２００１）

３－３　仏教に発する輪廻転生の考え方

　元禄９（１６９６）２月７日、松ヶ崎今泉村に鯨上る。村人・藩は神官をよんで湯立を行い、神のお告げ聞く：この鯨は、近江国竹生島弁財天のほとりに住んでいた大道心で、鯖となり海中に１２０年住み、去年９月死去、赤尾津の浜に寄る、「国もよく大旦那の子孫と申す」。（高野欽一『与次右衛門肝煎日記』秋田文化出版社、１９８１）

※亀田藩畑谷村肝煎・高野与次右衛門元政（米穀商人、藩入用にも預かる。１７後半～１９世紀に及ぶ豊富な留書類は亀田藩研究に必須の資料として、『本荘市史』各部分に引用・翻刻）

３－４　経済行為としての捕鯨の始まり

鯨絵巻という表現群の登場（鯨種類・捕鯨場面・捕鯨道具）

絵巻：８世紀後半書写「絵因果経」

１０世紀～貴族鑑賞用（物語・説話・日記・年中行事）

鎌倉時代＝受容者の拡大、戦記絵巻登場、鎌倉新仏教・旧仏教布教用（高僧伝など）、寺社の由来・縁起

１４世紀～大量生産、民衆化、類型化

（田口栄一「絵巻」世界大百科事典、日立デジタル平凡社、１９９８）

鯨過去帳・墓・位牌など、擬人化―理解・統御しようとする行為

※中世以前の鯨記事・描写

画像など　古墳時代　鯨を模した土製品

壱岐の鬼ノ岩屋古墳に鯨の彩色壁画

記事など　万葉集には「鯨魚取（いさなとり）」―すべて海の枕詞

平安時代　寄り鯨記事２例（対馬９１７・肥前国１１２７）

中世　鯨の記事激増　宮中への献上を記す内容が多い

（梶島孝雄『資料　日本動物史』八坂書房、２００２）